芝蘭会報

第203号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

②新任あいさつ
③校友会・KMS－FUNDだより
④第75回京都大学原爆災害綜合研究調査班遭難者の慰霊
人事異動・会員訃報

京都大学総長就任あいさつ

医学研究の推進力を糧に研究型大学をめざす

湊 長博

基礎医学記念講堂 階段教室で本庶特別教授と議論する湊総長

2020年10月1日をもって京都大学総長に就任致しました。第7代 荒木寅三郎総長（1915年）、第16代 平澤興総長（1957年）、第19代 岡本道雄総長（1973年）、第22代 井村裕夫総長（1991年）の後を受け継いでの、医学部からの第27代総長ということになり、文字通り身の引き締まる思いでおります。理事から引き続いての本部務めとなりますが、ねじを巻き直してがんばる所存です。

2010年から4年間の医学研究科長・医学部長の間にはいろいろありましたが、芝蘭会の皆様のご賛同を得て、長らく使われずひっそりと構内にあった旧解剖学講堂を、基礎医学記念講堂として昔のままの姿に再生できたことが最も心に残っています。今は、学生のメインの講義室として毎日使われています。私自身、最後の1年はこの講堂で免疫学講義をすることができましたし、最終講義まで行わせていただきました。芝蘭会の諸先輩の多大なご協力とご支援には心から感謝をしております。

本部へ移ってから6年間の理事の間には、本庶 佑高等研究院特別教授のノーベル生理学・医学賞受賞という大変うれしい出来事がありました。本庶特別教授の共同研究者として、新しいがん免疫療法の開発に少しでも貢献できたことは、この上ない誇りと思っています。芝蘭会の皆様のご支援により、構内に安藤忠雄さんのデザインによる記念モニュメントも完成しました。

世界水準の教育・研究を推進する京大医学部

さて、京都大学は、国立大学法人法の改正による「文部科学大臣が世界最高水準の教育研究活動の展開が相当程度見込まれる国立大学法人を指定国立大学法人として指定する」制度に基づき、2017年に第一次の指定国立大学の指定を受けました。この指定に当たり、担当理事であった私は半年におよぶ全学議論を経て、

①自由で独創的な知の創造を支える柔軟な研究組織体制の構築
②次世代若手研究者の育成と若い頭脳の国際循環の推進
③産官学連携の促進及び新しい人文科学の創出と社会への積極的な発信
④ボトムアップの議論に基づく実効的な大学運営と財政基盤の強化、

の4つの柱からなる将来構想を取りまとめました。

現在、この構想の具体化に向けての各種施策を進めているところです。特に①については、医学研究科・附属病院の役割は極めて大きく、2019年は文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」として斎藤通紀教授をリーダーとするASHBi（Institute for the Advanced Study of Human Biology）が発足しましたし、本年は本庶特別教授をセンター長とするがん免疫総合研究センター（Center for Cancer Immunotherapy and Immunobiology）が文科省の認可を受け発足、新施設工事も始まりました。医学領域が本学の研究推進の大きな原動力であることは変わりません。

国立大学としての使命を見つめなおす

我が国での18歳人口の著減を背景に、今日ほど国立大学のあり方が社会的に注目されることはかつてなかったと思います。文科省では現在、「国立大学法人の戦略的経営実現に向けた検討会議」を作り、内閣府、産業界を含む民間、および指定3大学（京大、東大、東北大）が参加して、国と国立大学との新しい契約関係についての議論を進めています。政府、産業界からの議論は専ら国立大学の運営（彼らは「経営」と言いますが）に集中していますが、国立大学は利潤を求める企業体ではなく、高い公共的使命を有する国民の公共財であるはずです。この原点に立って国立大学のあり方に係る議論に臨みたいと考えています。

1897年に創設された本学は、来る2022年に創立125周年を迎えます。これを機に全学の同窓会の皆様のご協力を得て、様々な催しを計画すると共に、将来の京都大学の健全な運営のための積極的な基金活動を行っております。芝蘭会は、全学で最も大きく頼りになる同窓会組織です。「地球社会の調和ある共存に貢献する」という基本理念のもとに、京都大学が世界に伍す研究型大学として一層の飛躍を期すために、これまでにもまして芝蘭会会員の皆様からの絶大なご支援とご協力を心からお願い申し上げる次第です。

みなと・ながひろ
1951年、富山県に生まれる。京都大学医学部卒。自治医科大学助教授、京都大学医学部教授、同大学大学院医学研究科教授などをへて、2014年から同大学理事・副学長。2010年から2014年まで同大学大学院医学研究科長・医学部長を務める。2020年10月に第27代京都大学総長に就任。専門は免疫学。

新任あいさつ

京都大学らしい新しい救急部門を目指す

京都大学大学院医学研究科
初期診療・救急医学分野 教授
京都大学医学部附属病院
初期診療・救急科／救急部
部長
大鶴 繁

令和2年6月1日付で、初期診療・救急医学分野の教授を拝命致しましたので、芝蘭会の先生方にご挨拶申し上げます。初期診療・救急医学分野は平成18年に開設されたまだ新しい教室ですが、京都大学医学部附属病院における高度急性期医療の扇の要としての活躍を期待していただいており、その重責に改めて身の引き締まる思いであります。

私は平成10年に神戸大学医学部を卒業致しました。在学中に阪神淡路大震災に遭いボランティア活動を行った体験が、現在の私の医師としての原点です。まずは多くの患者さん、幅広い疾患を対象とする消化器領域をサブスペシャリティとしながら救急医療に携わろうと考え、卒後すぐに消化器内科前教授 千葉 勉先生のもと、京大病院に研修医として入職しました。この時に得た経験や先生方との繋がりは、京大病院の救急医療の立ち上げに欠かすことができなかったと感じています。その後、救命救急センターを擁する大阪赤十字病院に赴任し、2年間のスーパーローテーションの後、救急医として、また消化器内科医として、多くの救急症例を経験致しました。

平成18年、前任の小池 薫先生の着任とともに帰学し、京大病院の救急医療の立ち上げを進めました。また救急診療の合間を縫って消化器内科肝臓研究室に赴き、がん幹細胞仮説研究や次世代シークエンサー解析技術を用いた生体肝移植例のC型肝炎ウイルス遺伝子解析など基礎医学研究に携わった経験は、救急のベッドサイドからだけでは決して得られない新しい視点を養ってくれました。

「京都大学医学部附属病院将来構想2013」にて高度急性期医療の推進が正式に掲げられたのを機に、院内から多くの支援が得られ、救急関連の診療実績が順調に伸びていきました。令和元年度の救急搬送台数はかつての3倍近い年間6000台を超え、またWalk-inを合わせた救急総受診患者数は約1万4000例に達しつつあります。京大病院の救急医療には、高度先進医療と高度急性期医療の両立が求められており、救急という広い基盤の上に高難度治療と研究・教育があり、若い医師・医学生のためにも救急医療の文化が根付くよう努めています。時代のニーズを見据えて、常に新しい救急医像を模索し、京大らしい次世代の救急医療のリーダーを産み育てるよう尽力致します。

また救急医学分野の研究は、救急医療があらゆる疾患に対して開かれ、かつ医療政策の影響を大きく受ける領域であることから、他の学術・政策領域も含めた学際的な協創の場として展開して参りたいと思います。京大救急らしい取り組みとして、災害医療の領域で京都大学防災研究所と協同して、防災関連の各種研究プロジェクトを推進しています。平成28年2月に、オール京大の分野横断・多職種連携による医療防災研究チーム「京都iMED防災研究会」を組織し、令和元年には医学部・附属病院・防災研が共同して、地域医療BCP連携研究分野が設立されました。災害研究は世界的にも未開拓な分野であり、医療防災の分野において京大は唯一無二の存在として世界をリードしていきたいと考えています。

さらに、平成30年より理化学研究所 神戸キャンパスの冬眠研究チームと共同して、冬眠動物が有する能動的低代謝を臨床応用するための研究を開始しています。人工的に低代謝誘導が実現できれば、急性病態における臓器保護や再生臓器の長期保存等、救急医療の質の改善に大きく貢献することが期待されます。

我が国では超高齢社会を迎え、疾病構造が大きく変化し、一方度重なる震災に加えて近年では豪雨災害等の多様な災害が頻発し、さらには今日のコロナ禍の様な新興感染症の世界的流行など、本邦の救急医療には時代とともに変革が求められています。是非、京都大学らしい新しい救急部門を目指し発展させたいと思います。芝蘭会の先生方には、引き続きご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

感染症流行のメカニズムと対策を理論的に解きほぐす

京都大学大学院医学研究科
社会健康医学系専攻
健康要因学講座
環境衛生学分野　教授
西浦 博

令和2年8月1日付で、小泉昭夫先生の後任として社会健康医学系専攻健康要因学講座環境衛生学分野の教授に就任いたしました。長い伝統と諸先輩方による数々の衛生学研究の業績を誇る教室の運営を任されましたことを大変光栄に思いますと同時に、その責任の重さに身の引き締まる思いです。この紙面をお借りして芝蘭会会員の先生方にご挨拶をさせていただきます。

平成8年に宮崎医科大学（現宮崎大学医学部）に入学。トライアスロンで身体と精神を鍛えつつ平成14年に卒業後、東京都立荏原病院での初期研修を経て、研究修行と活動の場を主に海外研究機関で構えて参りました。タイのマヒドン大学で熱帯感染症の疫学を学んだ後、英国、ドイツ、オランダ、香港へ移り渡りつつトレーニングに励み、平成25年に帰国して以降は東京大学で3年過ごしました。平成28年からは北海道大学大学院医学研究院社会医学分野衛生学教室の教授として研究を行って参りました。研修医以降は一貫して感染症疫学に取り組み、研究はもちろんのこと、海外でも教職員として学部・大学院の両方で社会医学の教育経験を積んで参りました。北海道大学では公衆衛生学修士（MPH）が取得可能な新規コースの運営に取り組みました。また、令和2年2月最初からは厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策本部において厚生労働省参与としてクラスター対策班などに参画し、流行対応に関わっております。

このような私の経験を、これまで脈々と培われてきた京都大学の医学研究科および社会健康医学系専攻の伝統と業績に融合することにより、社会医学を更に発展させつつ、新しい世代の優れた後進の輩出に努めることが私に与えられた使命であると肝に命じております。医学部教育では社会医学マインドをもって、個々の患者様に加えて集団の問題に目を向ける力を兼ね備えた医師の輩出に尽力いたします。私自身が医学部を卒業する頃に開講して憧れで在り続けてきた京大の公衆衛生大学院において、これまでの私の公衆衛生大学院等の教育経験や行政機関における研究フィードバックの経験を発揮して、京大のオリジナリティに溢れた魅力ある大学院課程が提供できるよう努力し、また、これまでの共同研究や短期集中コース開講などで構築したネットワークを活かして次世代専門家育成の加速化にも取り組む所存です。

研究活動においては、若者が感染症制御に独り立ちして取り組める主体性の強い動機をもつ教室となるよう、明るく、開放的で、社会的使命感を感じつつ研究に取り組める環境を作り上げ、多くの若者にとっての登竜門となる教室の運営を目指します。国内でトップクラスであることはもちろんのこと、世界で個々の研究者名が認識されるような研究活動を展開し、その充実のために力を注いで参りたいと考えています。芝蘭会の諸先生方におかれましては、ご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

自然と健康になれる社会づくりに向けた新たな医学の創成を目指して

京都大学大学院医学研究科
社会健康医学系専攻
国際保健学講座
社会疫学分野　教授
近藤尚己

令和2年9月1日付けで大学院医学研究科・社会健康医学系専攻・国際保健学講座・社会疫学分野の教授を拝命いたしました。紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

COVID−19のパンデミックは、感染による直接的な健康リスクの大きさに加えて、社会活動の自粛による間接的なリスクの大きさに、私自身も含めて多くの人々が驚き、動揺しています。コロナ禍で職を失った人、教育機会を剥奪された子どもたち、孤独感に苛まれる在宅勤務の会社員など、自分のおかれた状況に困惑しながら、同時に「社会」という存在が健康に及ぼす影響の大きさを強く自覚したように思います。

社会疫学は、健康の社会的決定要因の解明とその制御法をテーマとする疫学の一分野です。変化する社会の中で、どのような環境におかれた集団がどのような健康リスクを抱えるのかを観察します。また、社会変化によって広がった健康格差を制御するための介入手法を開発して、それを社会へ実装することで、危機に強く「誰もが自然と健康になれる社会」をつくることを目指しています。

平成12年（2000年）に山梨医科大学（現 山梨大学医学部）を卒業、2年間の医師としての臨床研修の後、公衆衛生学の新たな地平を切り開きたいとの思いから、ハーバード大学公衆衛生大学院教授であり社会疫学をその黎明期からけん引してきたIchiro Kawachi教授のラボに入門しました。米国社会が及ぼす健康への影響を肌で感じながら、社会と健康との関係を紐解く数理モデルや現象の測定法についての学びを深めることができました。帰国後は高齢者20万人の追跡研究である日本老年学的評価研究（JAGES）のコアメンバーとして、自治体や政府機関、世界保健機関等と連携しながら、実社会での健康格差是正に向けた社会環境の改善手法を開発、その実装と評価をする研究を進めてきました。

近年は、社会ストレスが人の行動特性に及ぼす認知バイアスの影響や、それを制御するアプローチ、あるいは発想を逆転させて、むしろ認知バイアスを活用することで人や組織の行動変容を促すアプローチにより健康格差を制御する社会行動モデルを考案しています。そして産業界や地域住民を巻き込みながら、考案した介入モデルを組み込んだ実践を行い、その実証研究を進めています。現場知を理論化し、現場にその理論を還元することでさらに研ぎ澄まして、それを国際的に普及させることで、誰もが自然に健康になれるコロナ後の社会を世界中に創りだしたいと思っています。

1200年もの間の人々の思いや葛藤でつくられた京都という地にあり、自由を学風とする京都大学において、社会疫学というまだ新しい分野を探求できることに大きな幸せを感じております。様々な方々との交流をはぐくみ、型にはまらない大胆な発想で研究を進めていきたいと思っております。なにとぞご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

訂正とお詫び

芝蘭会報第202号（前号）1頁の「令和2年度 春の叙勲」の受章者の氏名の記載漏れがありました。会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びするとともに、右のとおり追加訂正いたします。

令和2年度
春の叙勲

❖瑞宝中綬章

斎田孝彦（昭41年卒）
元国立病院機構宇多野病院長

芝蘭会費納入は自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。

ぜひ、ご利用いただきたくお願い申しあげます。手続きについては芝蘭会事務局までお問い合わせください。

手続き等については、

芝蘭会事務局
TEL　075-751-2713　　FAX　075-752-4015

ご注意

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合せはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会事務局　TEL●075-751-2713　FAX●075-752-4015

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金（KMSIFUND）だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.med.kyoto-u.ac.jp

新入生へのメッセージ
「古都に立つライオン」に

校友会会員
近藤克昭

京都大学医学部医学科令和元年度新1回生の皆さん、平成最後かつ令和最初の節目の年でのご入学まことにおめでとうございます。また校友会保護者の皆様におかれましては、謹んでお慶び申し上げます。

京都の遥か彼方の栃木県から高校2年生の夏に京都大学のオープンキャンパスを訪れた息子は、古都の街並みと大学の雰囲気に魅了され、以後志望校を変えることはありませんでした。関東在住者にとって京都大学の情報は少なく、さらには部活動が忙しく塾通いもしていなかったため、悪戦苦闘、怖いもの知らずの受験となりました。しかし、公立高校3年間の書道部活動（全国高等学校総合文化祭栃木県代表）や科学の甲子園全国大会出場などは、本人にとって貴重な経験になったようで、実質8月からの受験勉強もぶれることなく集中してこなし、何とか合格することができました。大学入学後は書道部やアルバイトなどの活動もしつつ、毎日充実した学生生活を謳歌しているようです。

さて、医学部に入学し医師へのスタートラインに立った今、学生の皆さんはどういう心境でおられるでしょうか。おそらく多くの方は、希望に満ち溢れ、自分の描く理想の医師像に向かって、日頃の勉強に邁進していることと思われます。実は私も医師の端くれで、皆さんからみれば一応先輩です。医師生活も30年近くになり、一貫して地域医療に従事してきました。日々患者さんと向き合っていると、この年齢になっても教えられることは多々あり、毎日が新鮮でかつ自分の未熟さを思い知らされています。皆さんも夏の早期病院体験実習では、医療の尊さや厳しさに驚嘆し、医学生という肩書だけでは何もできない自分の無力さを痛感したことでしょう。但し、無力であっても医師の卵のピュアな気持ちの今だからこそ感じられることがあるのも事実です。医師にとって一番大事なことは、常に謙虚さを持ち続けることです。臨床医、研究医のどちらの道に進むにしろ、今抱いている初心を忘れず、これからの医学部活動に真摯に取り組んでいただきたいと切に願います。

さだまさしさんの楽曲に「風に立つライオン」があります。また、私の母校・自治医科大学の校訓には「医療の谷間に灯を燈す」とあります。どちらも、私の医師人生において心の拠り所にしてきました。京都大学医学部の輝かしい歴史や伝統と理念を踏まえ、学生の皆さんにはぜひ、「未知の分野に灯を燈し、未開の領域を切り拓いて立つライオン」になってほしいと思っています。皆さんはその可能性を秘めた百有余名の若獅子です。

私たち校友会保護者一同は、皆さんのこれからに心から期待しています。応援しています。頑張ってください。

追記

掲載時期の関係で令和元年11月当時の内容です。何卒ご容赦ください。令和2年度新1回生におかれましては、コロナ禍でのご入学は色々な意味で大変でしょうが、明けない夜はありません。今はじっと力を蓄えてこの苦難を乗り越えて行きましょう。

若手研究者優秀論文賞KMYIA受賞者の言葉

博士課程 医学専攻
循環器内科学分野2回生
（論文発表時）
芳川裕亮

この度は京都大学医学部若手研究者優秀論文賞をいただき、身に余る光栄と感謝しております。木村 剛教授をはじめ、ご指導いただきました先生方皆様に感謝申し上げます。

受賞対象となった論文は、循環器内科のこれまで行なってきたCREDO-Kyoto Registry Cohort-2, RESET, NEXTの統合データベースを用いて、臨床スコア（DAPTスコア）の検証を行なった論文です。虚血性心疾患の治療として経皮的冠動脈インターベンション（PCI）は近年目覚ましい発展を遂げてきました。そして、PCIとともに重要なのが2剤併用抗血小板薬療法（DAPT）であり、現在ではPCI術後の必須の薬剤治療となっています。DAPTは虚血性イベントを減らす一方で出血性イベントを増加させるため、個々の患者のリスクに応じた治療方針が望まれます。DAPTスコアは、患者因子に応じて虚血ハイリスク（高スコア）と出血ハイリスク（低スコア）を層別化しDAPT継続期間の参考とするものです。欧米のガイドラインではDAPTスコアが推奨されていますが、大規模な外部検証は行なわれておらず、スコアの元となった研究の被験者のほとんどが白色人種でありました。アジア人種での外的妥当性が不明であったため、その有用性を検証しました。

日本人統合コホートにおいても、高スコア群では虚血性イベントが有意に多く、低スコア群では出血性イベントが多い傾向にありました。更にDAPTスコアの層別能そのものだけでなく、本研究の高スコア群の虚血性イベント率は欧米人コホートの4分の1程度しかなかった一方で、出血性イベント率は同程度でありました。相対的に虚血性イベント率が低く出血性イベント率が高い日本人患者にとって、虚血性イベントを増やすことなく出血性イベントを減らす治療マネジメントの重要性を認識させる結果でした。

このような大規模な研究は、studyに関わったたくさんの方のお力添えがあって初めて出せる研究成果だと思っております。この受賞を励みに、より良い研究ができるよう、そしてお世話になった方に恩返しができるよう、勉強を続けていきたいと思っております。

末筆ではございますが、教育研究支援基金に御寄附いただいた方々に心より感謝しますとともに、今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

博士課程 医学専攻
機能微細形態学分野4回生
（論文発表時）
山城知佳

この度は私の研究成果を平成30年度京都大学医学部若手研究者優秀論文賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。身に余るほどの高い評価を頂戴し、大変光栄に存じます。

今回賞を頂いた論文は、ヒトiPS細胞からの雌性生殖系列細胞の試験管内誘導に関する内容です。これまで生殖細胞の試験管内誘導に関する研究分野では、マウス多能性幹細胞から正常な産仔能をもつ精子や卵子へと分化させることに成功していましたが、一方でヒト多能性幹細胞を起点とした分化誘導については、ヒトiPS細胞から始原生殖細胞への誘導法は確立できたものの、その後の分化過程は再現できていませんでした。そもそもヒトを対象とした検討では産仔形成による機能性評価が現実的に不可能であり、誘導した始原生殖細胞が真に生殖系列細胞であることの証明には、誘導始原生殖細胞がその後、生殖細胞でしか起こらない現象、たとえばエピゲノムリプログラミングや卵母細胞への分化を示す必要がありました。

本論文では、ヒトiPS細胞から誘導した始原生殖細胞をマウス胎仔卵巣体細胞と凝集させ約4か月培養することで、卵原細胞へと分化することを報告いたしました。長期培養を経た誘導始原生殖細胞に由来する細胞ではインプリントの消去を含む大規模なDNA脱メチル化がみとめられ、網羅的遺伝子発現解析においてもエピゲノムリプログラミングの進行を裏付ける遺伝子群の発現変動が観察されました。また一部ではX染色体の再活性化もみとめられました。これらの細胞はDNAメチル化状態・遺伝子発現ともに発生約7～10週（妊娠9～11週）頃のヒト胎児卵原細胞に酷似しており、さらに一部の細胞群では卵母細胞へ移行する直前の段階まで発生が進行していることがわかりました。

本研究は、ヒトiPS細胞から誘導した始原生殖細胞が生殖系列細胞として分化することを証明しただけでなく、ヒト始原生殖細胞から配偶子（卵子）へ分化する過程の初期段階の解析を可能にしました。本技術は今後、卵子における遺伝情報継承機構の追究、不妊症の原因究明および遺伝病の発症機構解明に役立てられることが期待できます。

最後になりましたが、研究から論文執筆まで親身にご指導して下さいました斎藤通紀教授をはじめとする共著者の先生方、機能微細形態学分野のメンバーの皆様に深く御礼申し上げるとともに、京都大学医学部校友会の今後益々のご発展を心より祈念いたします。

受賞者の集合写真

第75回 京都大学原爆災害綜合研究調査班遭難者の慰霊

三密を避けてしめやかに

令和2年9月12日（土）に、広島県廿日市市宮浜温泉において、第75回京都大学原爆災害綜合研究調査班遭難者の慰霊を行いました。本年は5年に1度の式典を開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止への対応として、例年より規模を縮小した自由参拝形式にて執り行いました。当日はご遺族、名誉教授、廿日市市長、同市議会議長、市役所関係者、廿日市市大野支所長、広島市関係者、広島京大会関係者、芝蘭会広島支部関係者、京都大学からは、岩井研究科長はじめ副研究科長・副病院長・医学研究科職員、芝蘭会事務局等30名の参拝者があり無事慰霊を執り行うことができました。

木村 徹芝蘭会広島支部長

岩井一宏研究科長

京都大学原爆災害綜合研究調査班

京都大学原爆災害綜合研究調査班は、1945（昭和20）年8月6日に原子爆弾が投下された広島にいち早く赴き、被爆者の診療及び調査研究を行っていましたが、同年9月17日に西日本を襲った枕崎台風により、滞在先の大野陸軍病院が山津波に見舞われました。この時、理学部、医学部の教官と学生ら約50人で編成された調査班の班員のうち、11名が多くの患者とともに犠牲となりました。

人事異動

R2.6.30	本多 新	辞任	附属動物実験施設特定准教授 ➡ 自治医科大学教授
R2.7.1	吉田 都美	採用	薬剤疫学特定助教 ➡ デジタルヘルス学講座（産学共同）特定講師
R2.7.1	松原 淳一	採用	クリニカルバイオリソースセンター特定講師 ➡ 腫瘍薬物治療学講師
R2.7.1	岡野 高之	昇任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学助教 ➡ 同講師
R2.7.15	石井 暁	辞任	脳神経外科学講師 ➡ 同特定准教授
R2.7.31	小谷 泰一	辞任	法医学准教授 ➡ 三重大学大学院医学系研究科教授
R2.8.1	KIM, Minsoo	採用	細胞機能制御学特定准教授 ➡ 医学教育･国際化推進センター准教授
R2.8.1	西浦 博	採用	北海道大学教授 ➡ 環境衛生学教授
R2.8.1	田原 康玄	採用	ゲノム医学センター准教授 ➡ 同特定教授
R2.8.16	吉藤 元	採用	免疫・膠原病内科助教 ➡ 臨床免疫学講師
R2.8.31	北村 守正	辞任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講師 ➡ 金沢医科大学准教授
R2.9.1	近藤 尚己	採用	東京大学大学院医学系研究科准教授 ➡ 社会疫学教授
R2.10.1	森信 暁雄	採用	神戸大学大学院医学研究科准教授 ➡ 臨床免疫学教授

会員訃報

謹んでご冥福をお祈りいたします　　日付はご逝去日

杉本 高嶺	昭和 17 年専卒	平成 21 年 5 月 17 日
大野 賢	昭和 18 年卒	令和 2 年 6 月 28 日
門田 一郎	昭和 20 年卒	令和 2 年 8 月 10 日
杉本 敏夫	昭和 20 年専卒	令和 2 年 7 月 6 日
河北 成一	昭和 21 年卒	令和 2 年 1 月 24 日
奥村 五郎	昭和 21 年薬卒	令和 2 年 8 月 22 日
宮崎 瞭	昭和 22 年卒	令和 2 年 7 月 27 日
田中 久	昭和 22 年薬卒	令和 2 年 5 月 10 日
山口 英夫	昭和 23 年卒	平成 31 年 1 月 28 日
波多野 一男	昭和 23 年専卒	平成 29 年
石黒 功三	昭和 23 年薬卒	平成 28 年 5 月 4 日
渡辺 俊雄	昭和 23 年薬卒	令和元年 5 月 9 日
岡村 通	昭和 25 年卒	平成 21 年 12 月 3 日
小泉 勇	昭和 25 年卒	令和 2 年 6 月 4 日
福島 浩三	昭和 25 年卒	平成 28 年 10 月 23 日
山本 善和	昭和 25 年専卒	令和 2 年 9 月 12 日
曽我美 勝	昭和 26 年卒	令和2年8月
奥田 拓男	昭和 26 年薬卒	
川村 次良	昭和 26 年薬卒	平成 30 年 12 月 22 日
吉本 静夫	昭和 26 年薬卒	令和 2 年 3 月 21 日
鎌田 洋一郎	昭和 27 年卒	平成 30 年 10 月 7 日
上田 進一	昭和 28 年卒	令和 2 年 8 月 10 日
大谷 博	昭和 28 年卒	平成 30 年 10 月 12 日
右京 成夫	昭和 29 年卒	平成 30 年 12 月 26 日
安藤 康雄	昭和 29 年薬卒	令和 2 年 7 月 14 日
宮脇 英利	昭和 30 年卒	令和 2 年 5 月 15 日
田崎 克司	昭和 31 年卒	令和 2 年 7 月 13 日
永浜 勤	昭和 31 年卒	平成 29 年 12 月 12 日
岡 宏	昭和 32 年卒	令和 2 年 8 月 8 日
白川 彰	昭和 32 年卒	令和 2 年 5 月 24 日
仁志川 泰治	昭和 32 年卒	平成 30 年 4 月 10 日
浜 将治	昭和 32 年卒	令和 2 年 10 月 4 日
濱田 忠彌	昭和 32 年卒	令和元年 11 月4日
高橋 正彦	昭和 33 年卒	令和 2 年 8 月 16 日
鈴木 陽一	昭和 34 年卒	令和 2 年 10 月 7 日
後藤 博一	昭和 35 年薬卒	令和元年5月１９日
寺田 弘	昭和 35 年薬卒	令和 2 年 6 月 1 日
神谷 重徳	昭和 36 年卒	令和 2 年 7 月 31 日
渋谷 倢	昭和 38 年卒	令和 2 年 9 月 3 日
南 亮	昭和 39 年卒	令和 2 年 10 月 16 日
清瀬 準	昭和 40 年卒	令和 2 年 4 月 16 日
岩本 十九二	昭和 40 年院卒	令和 2 年 11 月 4 日
藤田 修弘	昭和 41 年卒	平成 31 年 3 月 15 日
高山 直子	昭和 44 年卒	令和 2 年 7 月 17 日
野本 幸之助	昭和 44 年卒	令和 2 年 3 月 13 日
朴 勺	昭和 47 年卒	平成 30 年 10 月
仕合 邦雄	昭和 47 年院卒	平成 31 年 4 月 23 日
前田 行雄	昭和 48 年卒	令和 2 年 8 月 5 日
加藤 博明	昭和 50 年卒	令和 2 年 2 月 19 日
鈴木 知亜樹	昭和 50 年卒	平成 30 年 12 月 30 日
有岡 功貴	昭和 52 年卒	令和元年 5 月 31 日
宮崎 一之	昭和 57 年院卒	令和 2 年 1 月 27 日
鎌田 貴裕	平成 25 年卒	
辰巳 熙	教室会員　医科学	令和 2 年 6 月 23 日
神田 孝	教室会員　内科２、病理	平成 7 年 4 月 4 日
福井 京	教室会員　内科２	平成 21 年8月
松山 均	教室会員　内科２	令和 2 年 8 月 9 日
知原 秀明	教室会員　眼科	
阪井 邦男	教室会員　産婦人科	
玉井 研吉	教室会員　産婦人科	令和元年8月
柴 正記	教室会員　耳鼻科	令和 2 年 7 月 7 日
小野 克巳	教室会員　口腔外科、耳鼻科	平成 27 年 10 月 18 日
勝田 尚男	教室会員　口腔外科	平成 11 年 9 月 11 日
玉井 昭三	教室会員　口腔外科	平成 28 年 10 月 16 日
松井 昌	教室会員　口腔外科	平成 24 年 12 月 12 日
山内 寿夫	教室会員　口腔外科	平成 30 年 8 月 1 日
中田 勝次	教室会員　病理学	令和 2 年 9 月 13 日

事務局から

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはＦＡＸにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。

FAX ０７５－７５２－４０１５

原稿募集

＊＊＊

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。

芝蘭会報 編集委員会

芝蘭会報編集委員会
委員長　髙折晃史
委員　中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也
芝蘭会雑誌部
顧問　髙折晃史
部員
（6回生）加古敦也、松本一希
（5回生）谷本将崇、小野譲騎、西垣利彦
（4回生）岡和來、西村健太、秋宗俊久、原明弘、森田瑛、吉村太貴、樺井良太郎、濱田草太
（3回生）奥野芳樹、青木ちひろ、福井貞孝
（2回生）三宅大河、小林空暉、小澤司陽、大島輝、野洲春菜
芝蘭会事務局
事務局長　山田均
総務課長　秋山和美
管理課長　森勝二

制作協力　京都通信社
デザイン　納富進